



TITLE:

# 日食の枝幸を憶ふ(下)

AUTHOR(S):

柴田, 淑次

---

CITATION:

柴田, 淑次. 日食の枝幸を憶ふ(下). 天界 1936, 17(187): 16-19

ISSUE DATE:

1936-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167358>

RIGHT:

## 日食の枝幸を憶ふ (下)

柴 田 淑 次

### 3) ストীবとソファイ

校舎の眞東にポプラとトド松の並木に囲まれてボツンと1軒、村には大きい建物がある。それは枝幸村實科女學校であり、私達の宿舍である。其の講堂兼教室に半分畳を敷いて寢室とし、後の半分にストীবとソファイを置いて談話室とする。私は6月10日過ぎ幸ひ僅の暇をぬすんで上斜里方面を見學に出かけたが、歸つた時にはやはり此の私達の宿舍が一番いいナアと思つた。ストীবを囲みながら背の低いフカフカとする此の幾つかの安樂椅子に腰かけて、私達は幾度か仕事の相談をし、來るべき日食の計畫をした。鐵板でいとも簡単に作られた此のストীবに白樺のまき割を入れると恐い程よく燃える。私達は雨の夜、此のストীবを見つめながら談笑の幾夜かを過した。香の良いコヒイのため、ストীবの上にのせたヤカンの白湯が心持よくシンシンと沸いて居た。又私達は傍のテーブルに向つて、故郷へ友人へと幾通の手紙を書いた事であらう。誰が挿したか東側の窓には可憐な鈴蘭が1輪2輪、氷雨が窓を叩き、松を動かす和風が遠く波の音を運んで來ても、宿舍の中は暖かい。私達はコヒイを飲み林檎を食ひながら故郷より届いた小包を開いて居た。枝幸の思出、それは、半ばストীবとソファイの追憶であらう。

### 4) 日 章 旗

運命の日、裁斷の日、其れは6月19日である。朝來の快晴。青空高く、日の丸の旗が南々西の風に翩翩とひるがへつて居た。キャンプより遠く四方に離れて一すじのロープがはり廻らされ、赤い旗と共に一般參觀者の群をくひ止めて居た。私達は此の快晴を利用して器械の最後の調節をした。私はコリメ1タ1を外してスリツトを取去つた。正午、依然として空は快晴、風は段々おさまつて來る。絶好の日和、私達は先づ成功を祈つて乾杯した。第1接觸、私は案内望遠鏡の視野の中でやがてかけるべき左隅を見守つた。時計のカウ

ントが聞えてしばらく眞西の方向に微かに食ひ込みを感じた時、遂に第1接觸は始まつたのである。コロナグラフの方で寸刻を入れず部分食の撮影が始まつて居る。シャタ1係と取替交換係りとの間の聯絡呼聲がしきりに起る。私は皆既迄しばらく暇なので部分食撮影の應援に出かける。皆既30分前、私はスペクトロ・グラフのシロスタツトの時計を巻いた。そして暗室より乾板を持つて来る。しばらくして部分食撮影も終つた。太陽は半ば以上かけて五日月位、校庭に居る他の少數の關係者は曇りグラスを翳しながら缺行く太陽を見つめて餘念がない。一刻一刻皆既へと近いて行く。半ば缺けた太陽は急に細くなる。皆既10分前、乾板を器械に入れる。5分前引き蓋を抜く。案内望遠鏡内の太陽は細く光つて糸の様、其して恐しい速度でかけて行く。2分前やがて時計のカウントが聞え出した。チラと見た外の景色は洞窟の日蔭の様に凄惨だ。荒木君の時計記録のリレ1の音が開始された。私は右手にシャタ1のリリース左手に乾板移動ハンドルを握りながら、デツト望遠鏡の視野を監視した。かくなる上は是非にも及ばぬ、最全の努力を盡して遂行するのみ。豫定の時刻の僅か前、針金の如き太陽の西端が所々千切れて來た。ベリ1のビーズ、次に来るものはフラツシュである。次の瞬間私はシャタ1を切つて居た、露出1秒、そして1秒おきに5回切つた。其の途中、何處かで皆既を報ずるベルを聞き、其の瞬間太陽は全くかくされて終つた事を覺えて居る。續いて30秒の露出。コロナのスペクトルのため、望遠鏡の中にはコロナとプロミネンスが白く輝いて居る。併しどうした譯か非常に淡い。雲？霧？ガス？10cm、F11の望遠鏡にしてはもう少し見えても良い筈なのに。そんな事をチラリと考へたまゝ30秒の露出を終へる。1秒の間隔を持つて連いて1分の露出。同じくコロナのスペクトルのため、此の邊になつて私もすっかり度胸が据はり露出をしたまゝ小屋の窓に寄りかゝつて直接コロナを見て居た。太陽の周圍に迫つて雲がしきりにわいて居る。もしかしたら太陽にも極く薄い雲がかゝつて居るかもしれない。雲の事がしきりに氣にかゝる。併し何たる此の明るさ。雲の勢でもあらうがローソツプの日食に於いて経験したものの數倍明るい。それにしてもコロナの壯絶な形はどうであらう。所謂中間型と云はうか、四本柱につき出て居る流線の白い輝きは、南洋で見た極

少型と全く趣きを異にして限りなく美しい。プロミネンスが二つ三つ、白味の勝つた桃色をしてキラキラと輝いて居る。金星が下に輝然としつゝ三笠山の上にらんらんと輝く此の壯觀を私は此の1分間の露出の間に充分眺める事が出来た様に思つた。1分間は長かつた。やがて規定の時刻が来てシャッターをとお續いて10秒の露出をする。全部の撮影が豫定通り行つた時私は案内望遠鏡より目を離し、やれやれと一瞬茫然として居た。併も次の瞬間再び小屋の窓の所に寄かゝつて、今度はコロナグラフの観測員の活動を見守つて居た。コロナグラフは既に撮影が終つて、部分食の撮影のための準備に大忙の時、目の下には時計係りが肩で息をしながら、カウントを読み上げるのに懸命である。再び目をコロナにうつした瞬間、生光が現はれた。後で考へると私が撮影を終へてから此れ迄、5、6秒の間である。生光の時は太陽は薄雲中にあつた。美しい Diamond ring も雲に禍されて目では非常に見にくかつた。約30秒の後、荒木君の仕事も無事終つた。待望の2分、恐しい2分、私達の2分はかくして無事終つたのである。直後に仰ぐ日章旗それは尙薄暗い空に映じつゝ南の微風にそよいで毅然として翻つて居る。コロナグラフでは再び部分食の撮影中、私達は比較スペクトルを入れるため、再びコリメータの取附けにかゝつた。そうして第4コンタクトの後、無事比較スペクトルも入れる事が出来た。空は再び快晴となつた。完全に仕事を終つてから私達は御互に今日の良き日を祝ひ合つた。生光時に雲があつた事は何よりも私達の氣にかゝつた。併し皆既の前半は晴れて居たと云ふので、せめての望みをそれにつないだ。今にして私に了解出来たのは、私は望遠鏡にサングラスをつけたまゝ、コロナを見て居たのだつた。雲の事ばかりを氣にして居た私にはサングラスのある事には全く氣がつかなかつた。皆既中自分では、落ちついて居る積りでもやはり何處かにあはてゝ居らしい。仰げば快晴の空は一點の雲も無い。太陽は何事もなかつた如く今や西山に没し様として居る。戦はずで御祝ひに來た村の人達も嬉しさう。心持良い微風は我々を興奮より沈靜へと戻しつゝある。過にし戦ひを嚴然と見守つて居た日章旗は暮れかゝる暮色にクツキリと浮び出て、今日の良き日を象徴するかの如くであつた。

其の夜遅く私達はスペクトルの乾板を現像した。再び緊張した私達に與へ

られた結果は豫期以上の見事な成績であつた。案の如く Flash は5回の撮影中に完全に收つて居た。コロナのスペクトルは雲があつたか否かに拘らず見事にリングが數環、帯の上に浮び出て居た。翌朝やつと寢についた私はすべてを忘れてグツスリ眠る事が出来た。

### 5) 40日をふり返つて

過ぎにし日食より歸つて今更ながら北海道の40日がなつかしい。雨も降り風も吹いたけれど幾多の思出を残して來た。1 昨年の南洋の觀測に比して内地に近いだけにあらゆる點が便利であつた。併しそれにもまして村人の十二分の御世話には、唯々感謝の言葉もない。私には今後、又何時の日か日食に遭遇する事もあらう。併し過ぎにし此の40日間の一時程感謝に堪えない日を過す事は稀であらう。幸ひ無事に觀測を終える事が出来たのは決して天氣のせいのみではない。更に其の天氣と云へども或は村人の心からなる祈りの賜ではなかつたらうか？ 靜かにして深みのある、いたづらに騒がざる親身の御世話是我々觀測者にとつて此の上ない援助であり、全く安心して身を託せる様でもあつた。時は流れて何時の世にか、枝幸を憶ひ日食を浮べ、其日を追想する人の心には必ず村人のやさしい顔が重映するであらうと信ずる。(終)

### □ 反射鏡のアルミニウム鍍金の費用 □

英國ロンドンのアダム・ヒルガ1會社は近年いよ々々反射鏡のアルミ鍍金を一般需用者のためにやり始めたが、其の費用は、1ケづつにつき下の如くである由。

Up to 3 ins. dia.	£ 1. 5. 0.	Up to 9 ins. dia.	£ 3. 0. 6.
4 " "	1. 8. 0.	10 " "	3. 10. 0.
5 " "	1. 12. 6.	11 " "	4. 0. 6.
6 " "	1. 18. 0.	12 " "	4. 12. 0.
7 " "	2. 4. 6.	13 " "	5. 4. 6.
8 " "	2. 12. 0.	14 " "	5. 18. 0.

但し、上記は1ケづつの費用であるが、多數の場合には多少の割引をする由。

又、現在は14吋までの鏡面に止まるが、近い將來には20吋位まで可能となる由。